

幻の寺跡

吉田を歩く

吉田地区江川集落の高台の見道寺という場所に小堂と墓地があります。

江戸時代、吉田村には、日蓮宗 顕妙寺、同・円充寺、天台宗・蓮城寺、同・妙覚寺の4カ寺が存在したほか、1700年ごろには真言宗・米倉村西光寺の檀家もあったようです。

1700年ごろ、吉田村の20数人が真言宗の寺(庵)を建てたものの、村内の他の寺院(妙覚寺)から寺社奉行に訴えられる騒動が起きました。

1777(安永6)年妙覚寺の僧が訴えた内容は、(妙覚寺の)檀家だった



見道寺跡に残る石造物(写真右端の墓石が開山塔)

20数軒が見道寺に移ったため、もともと貧窮の寺だった妙覚寺が今後成り立っていかないこと、妙覚寺がもともと行ってきた村の熊野神社などの祭礼もできなくなってしまったことなどでした。訴えから1カ月ほどした同年3月、妙覚寺側と村民側の代表が江戸に出向き対論することになりました。

江戸時代、民衆の戸籍が寺院によって管理される寺請制度や菩提寺の檀家として葬儀や墓地の管理など寺と関わりを持つ檀家制度がありました。

裁許の結果は、庵と位牌堂が取り壊され「字見道」の地名のみ残すことになり「幻の寺跡」となっていました。そして寺跡の墓地は、今後天台宗・真言宗・日蓮宗檀徒の共同利用とすること、神社の神事、祭礼などは従来通り妙覚寺が務めることなど同寺の主張がほぼ認められたようです。

真言宗の寺院を建てたいという吉田村びとたちの願いはかないませんでした。その背景には1630年代以降、幕府が各宗派に新しい寺院を建てることを禁止したことがあったのかも知れません。

寺跡に残る石造物などから1700年代に吉田村と近隣7カ村53人の真言宗信者による「寒念仏」があったことなどが知られ、墓地整理の際にも幻の寺・見道寺を創建した僧の墓も失われることなく残されています。

(市文化財審議会委員・依知川雅一)